

花火秘傳集

全

匠師三十二

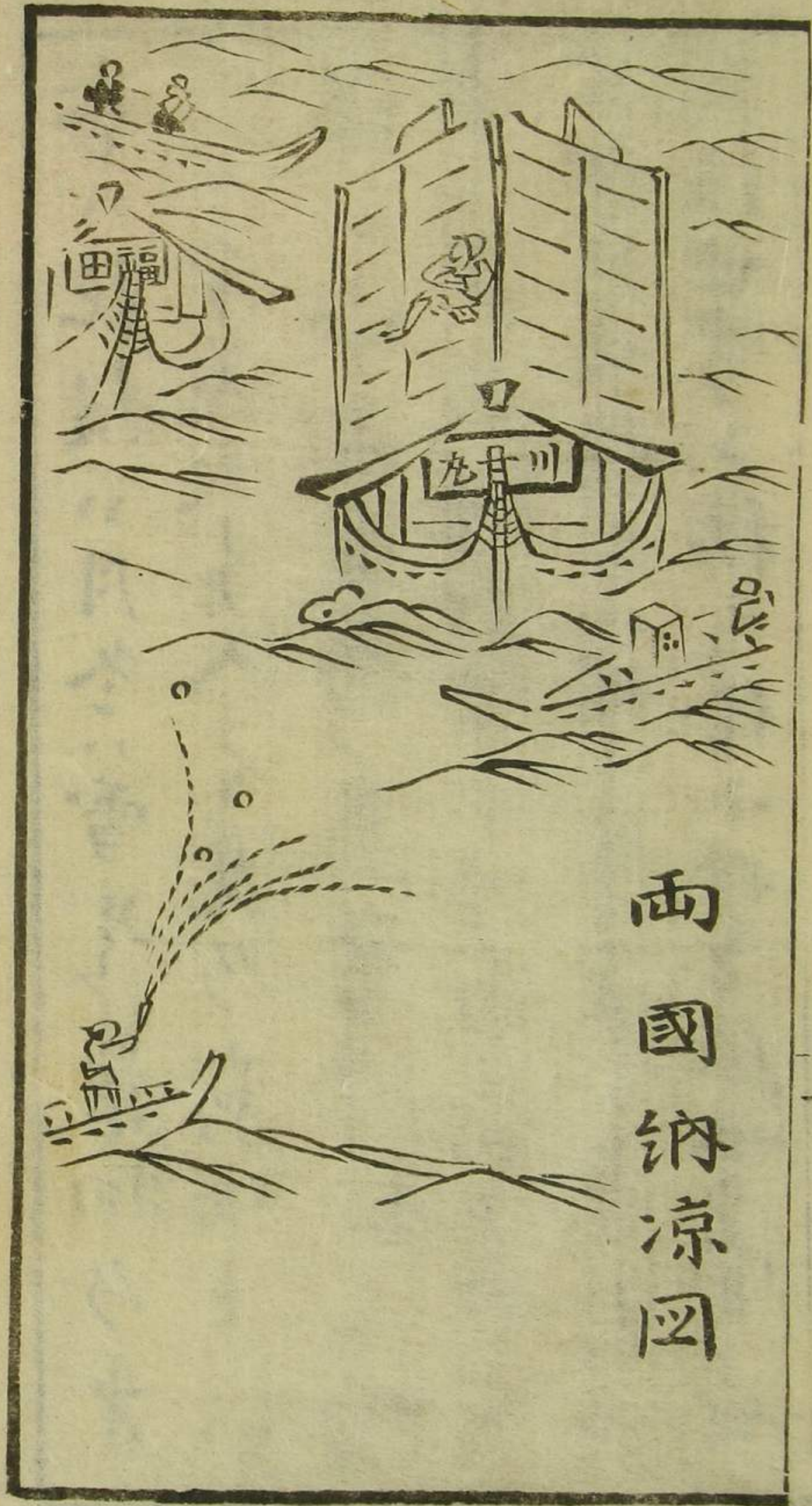
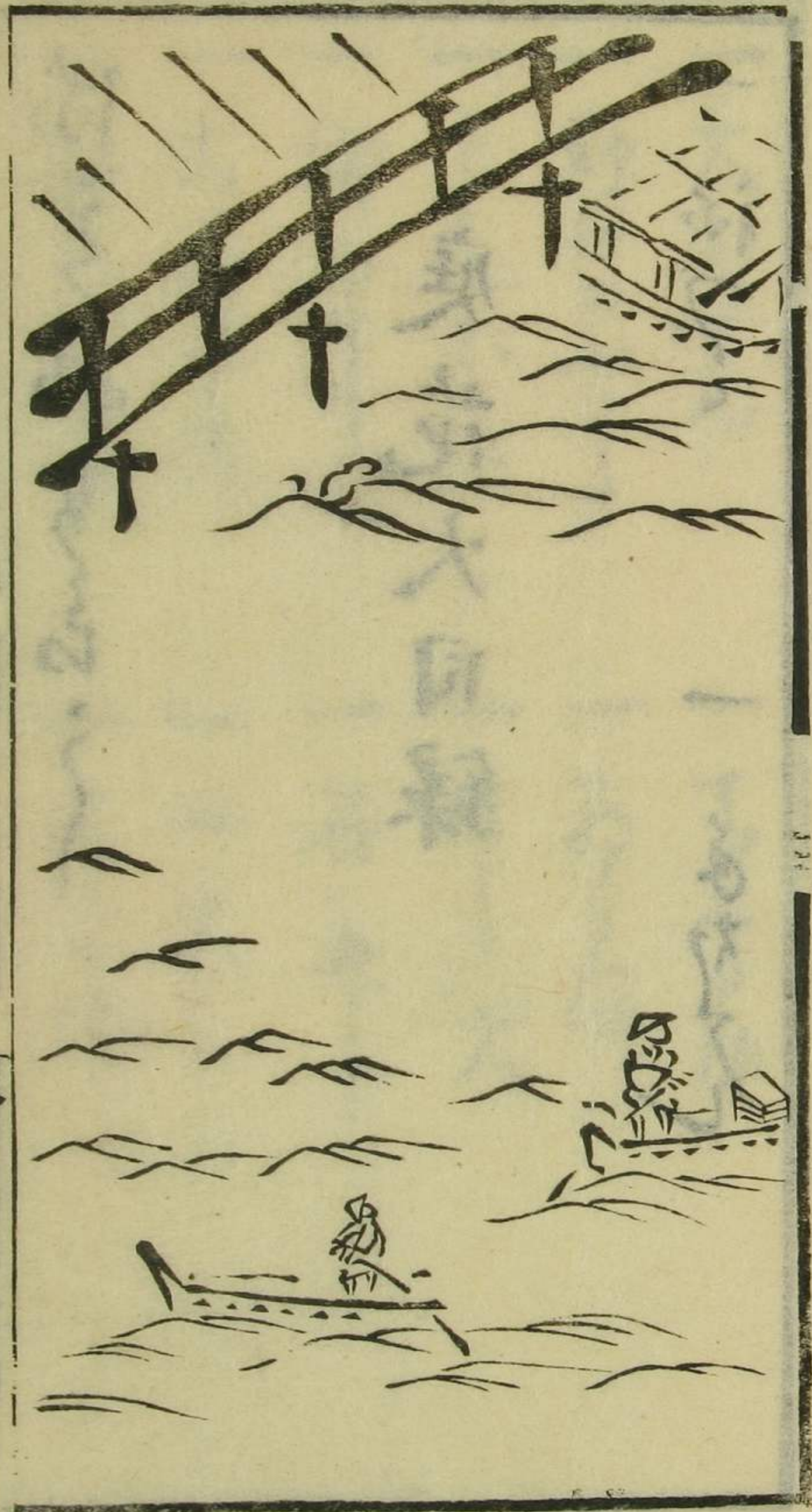
79
1571



門ヲ勤
1571



春
花秋の月冬の雪は景物乃才
一之今花火を入る夏乃景物と
誦小水面を照る壽有詩舞入唱
采乃声武總勢中乃由花り升也
月雪乃風情を一時不見くとし去るれも
其法世の中稀に依小冊を孤世の家と守



兩國納涼図

流き流しがらしく

庭花火目録

- 一 祇つこ
- 一 ちぢん

一 大ぢん	一 ちぢん
一 野田のや	一 ちぢん
一 とんか	一 ちぢん
一 柳さき	一 石舟
一 大利子	一 口火
一 都のき	一 蓮花

一金共赤花	一若座く
一武蔵の萩	一秋の白きハ
一三圍一	一虫尺
一千走むる	一笛筋
一花うらむ	一玉ひ
〜〜縁終	

一 嵐

一 名人ち〜 百目


一 い〜 拾四

一 灰 武拾

長金尺 五寸五分

只

右ハ蒔の好〜を付て切長五寸五分を寸
 小きり切口分 隠ふかく 漢菜五分 福尻



四錦をて落節ぎハの所をきりて
三口火を三分斗切すし四焼を

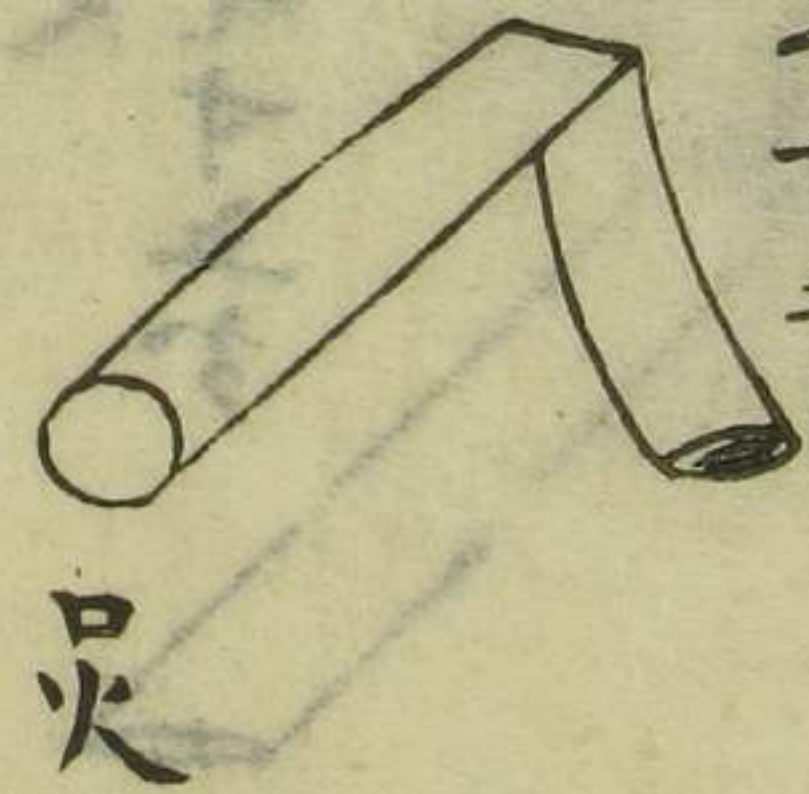
手むしん

長サ七寸五分

一 急んじり 百匁

一 いりり 六匁

一 灰 八匁



一 換 三匁

天楯棟半紙をて西の内よてもを才五分
四方小切箸をて随分かく巻を半分を
部やき半分はかく茶漬る之熱る換の
くよあハ花より出る之種と茶と更合
持中の換入く茶ハ久あ更かく

げきを火の口

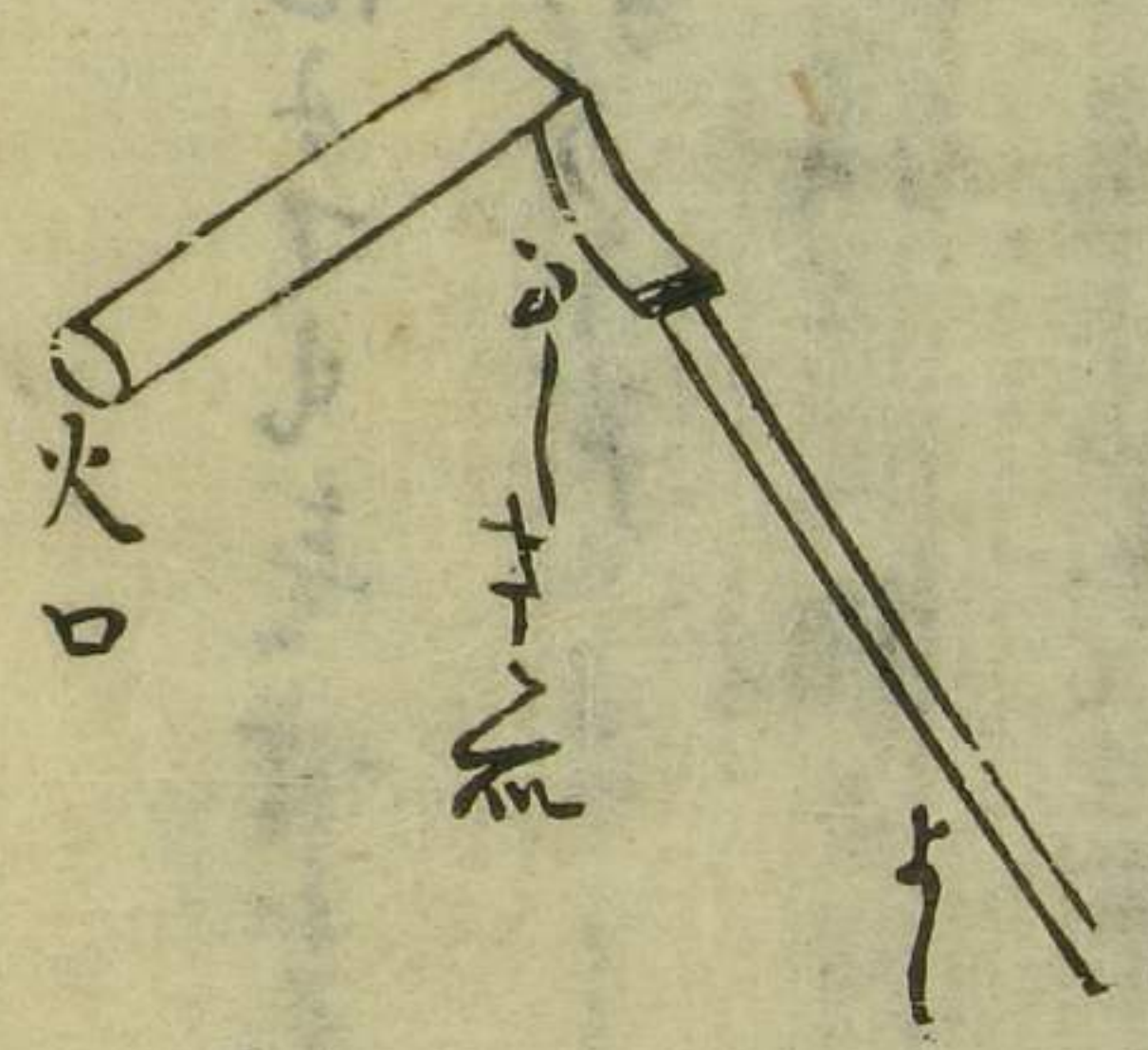
大牡丹

一 焰硝 百目

一 硫黄 百目

一 炭 七目

一 大鉄 三目



一 中候 式

一 之ちん候 式

右ハ始のとき 拵中以 帛ハ巾書之 寸

四方ニ仕以 灯ノ 薪ニ 火ニ 而 之ニ 指

手ヲ 拵 之 以 或ハ 火ノ 寸 此ニ 階 第

ナリ 骨ノ 尖ニ 拵 以 火 之 兩 端 之

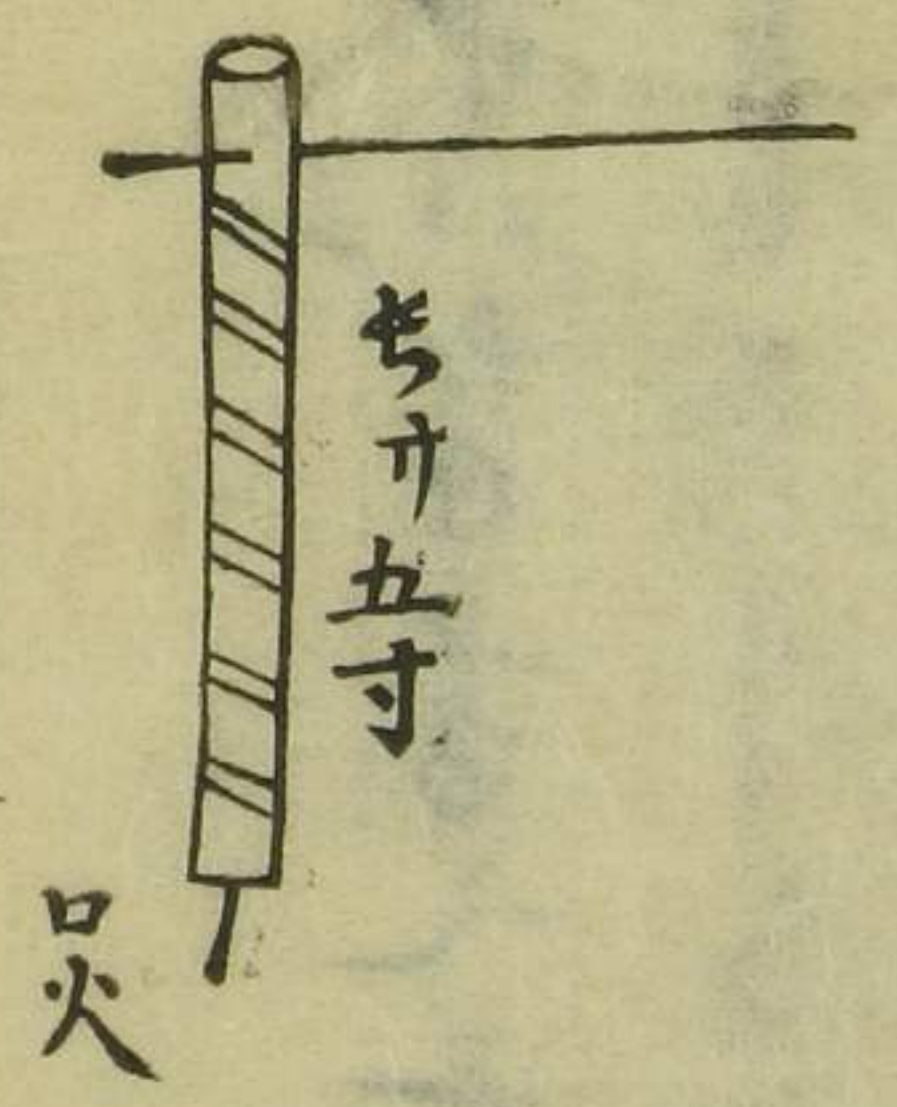
落しよひいぬく花出たふえりよ4本
よのこしをさし

天車

一 煮んぢ 百目

一 いり 廿四目

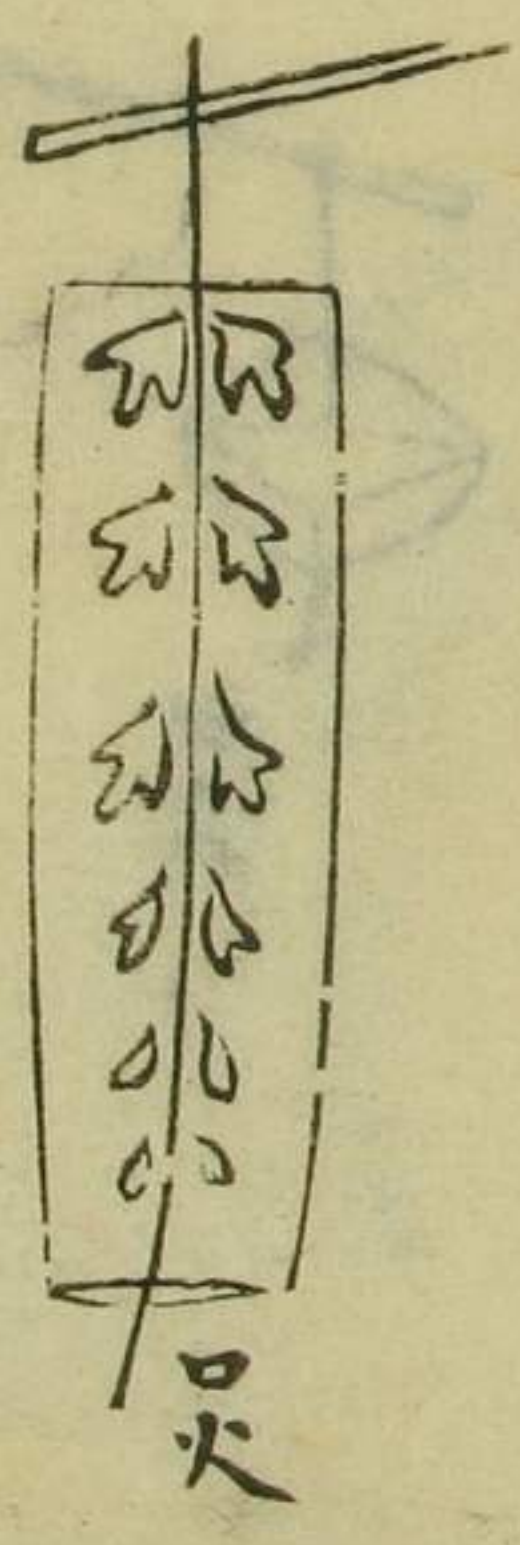
一 ちい 三初目



右 拵中 ぬきき 炭を五寸さうりお切
茶 喫く 流尻 廻 拵 灯 中

野田乃 拵

一 いり 百目

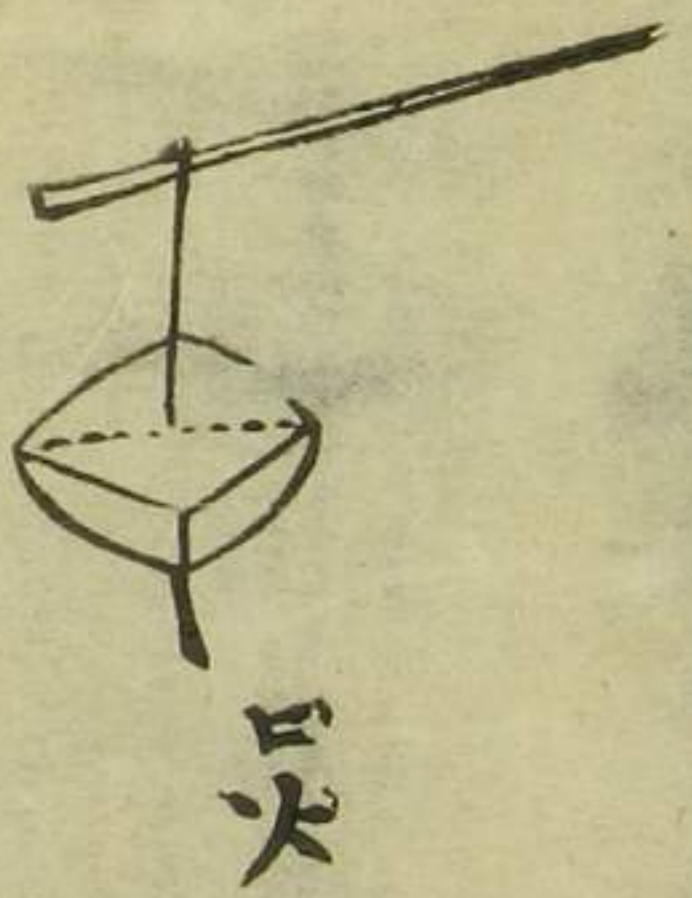


右 一色 湯 入 拵 湯 の 湯 入 拵
いり 子 を 煮 の か ち ら け こ 入 拵 在 い

口付く末を袋の入口火をくわく
茶柄も先へ

朝白

一硫黄 百斤



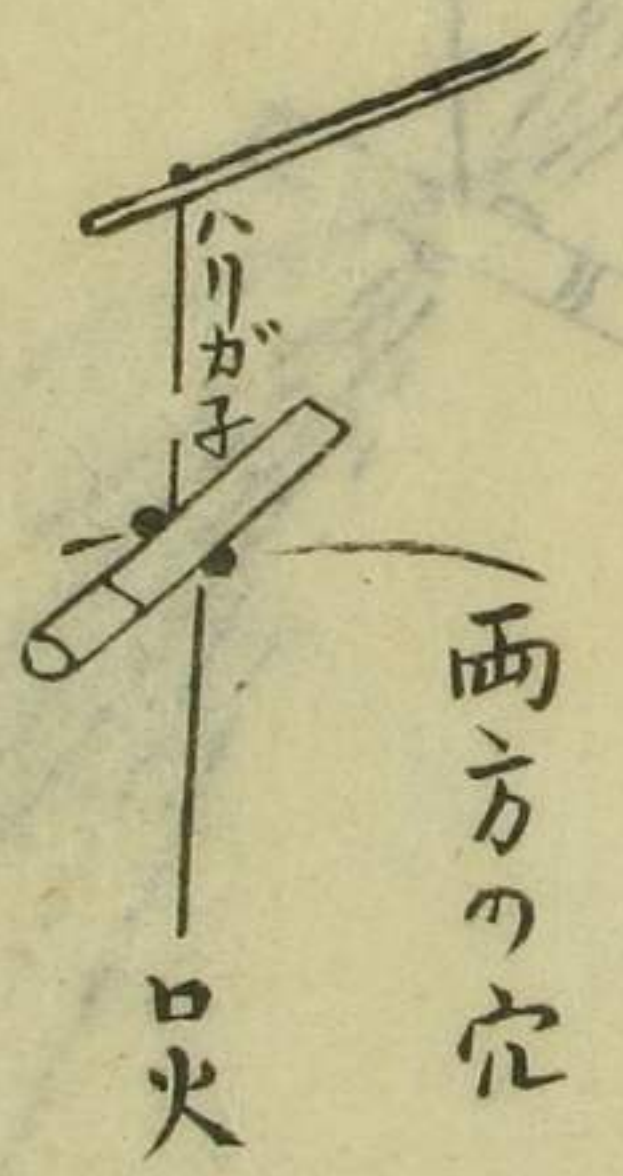
お尋やう後ま回し先へ附木を丸くして
釜の上へく上を袋の中へ包口火を丸くして

おらんぼ

一多入ちり 万包

一いり 拾中包

一灰 五包

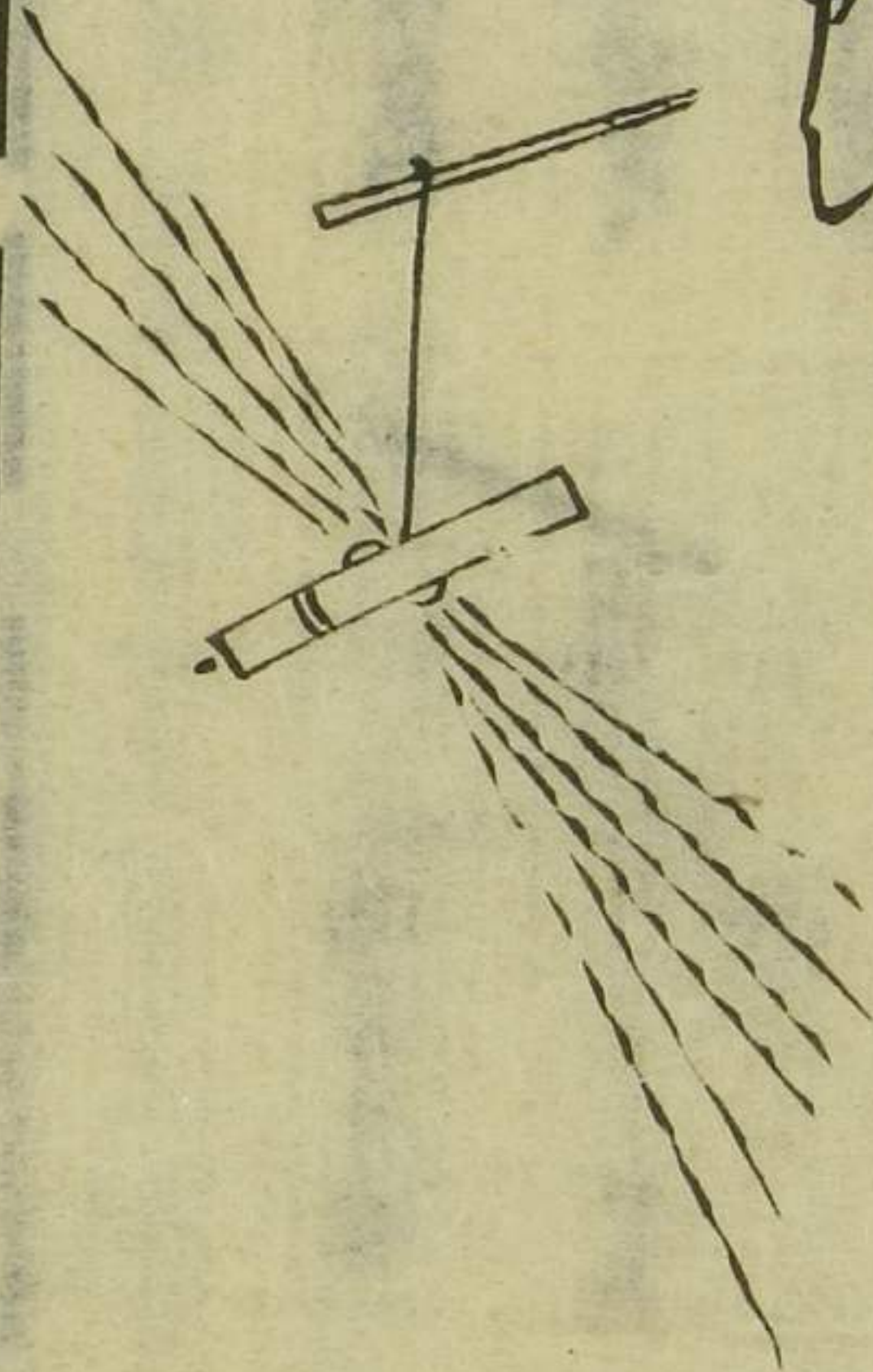


おかし竹長サ二寸そりぬり中へ切中
穴のまへへおかし穴をぬりぬり

穴両方

五分ちりり茶徳分かく流尻廻海
 妻方の穴くちりりがひ通し〜ま〜両方の穴く
 口火を通し〜たし

おのほりく園



蝶火

一 ちんちん

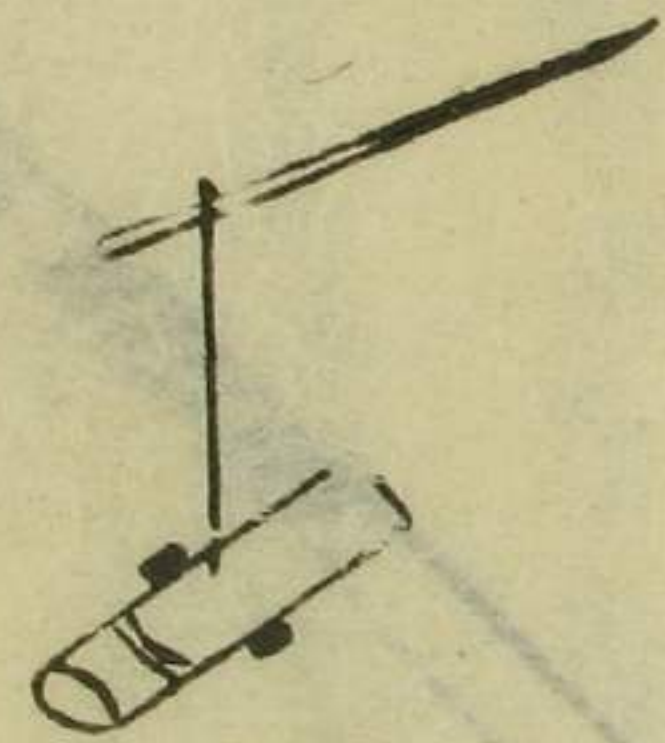
百々

一 いりり

三拾式

一 ちんちん

七々



おかし〜ちんちんちんちんちんちんちんちんちん
 の園ハとんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん
 略 臣火の色ハ

晴鈴よりも白く

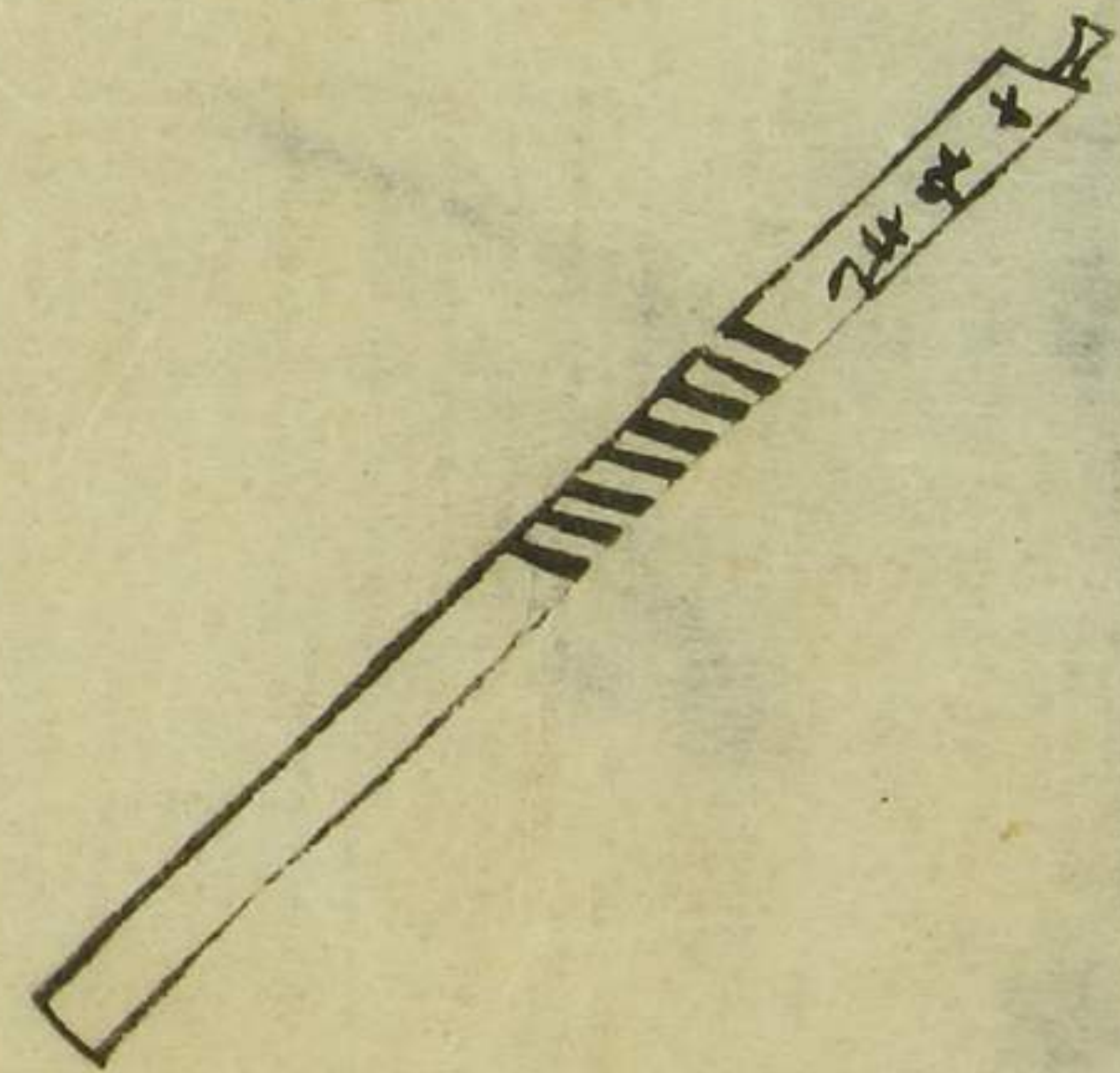
柳薬

一 燭硝 百斤

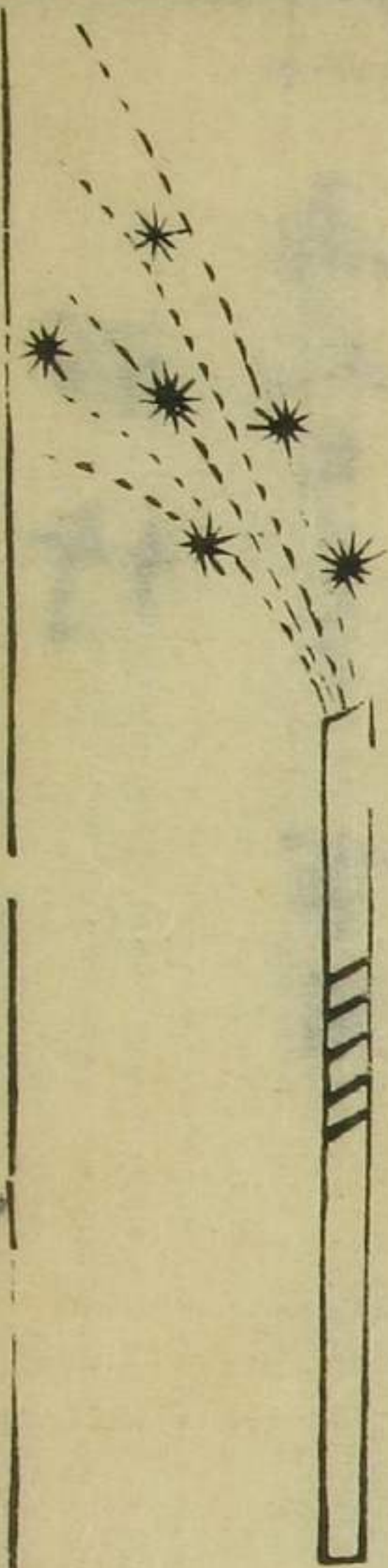
一 硫 拾貫

一 さい 四拾斤

一 鉄 三斤



お梅方花の隠ふやまを長を尺四五寸
にきり 炮口を蓮子切せつゝを寸をうり
深く入茶をいぬやんりきも隠ふ
法々々 とほりの圖



后竹

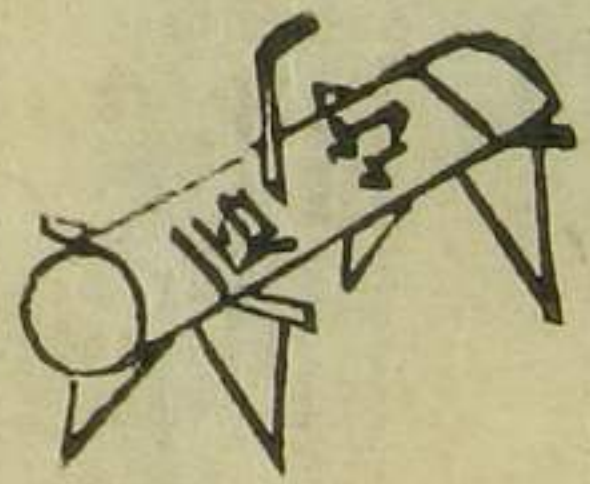
一 五んち 百目

一 いちり 拾四目

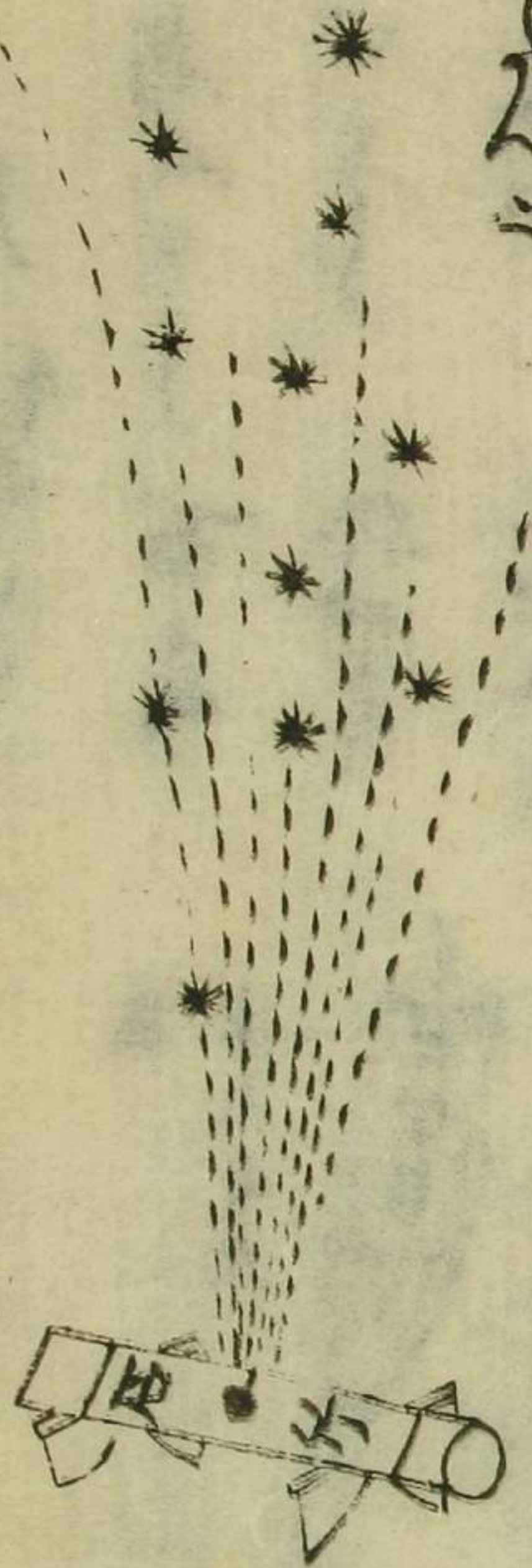
一 さい 三拾五目

一 鉄 甲由年

糸 糸の結ぶるをとちみす斗ぬしをけり切



一 穴一ツ 如回 柳葉を他にかくつめ尻辺に
 綿まの板のこく 足を付さぬし口火の
 びん



大梨子

一 多くは 百文

一 少くは 拾文

一 三拾文

一 五文

大槌火吹糸位の竹を金さし一丈



長 金尺五尺

茶六斗詰り

斗を附て切ぬ一乃先へ穴をあけ

如圖口火をさし一辺あり法中以律あり

さい推して隠分りて法鹿の綿を八文

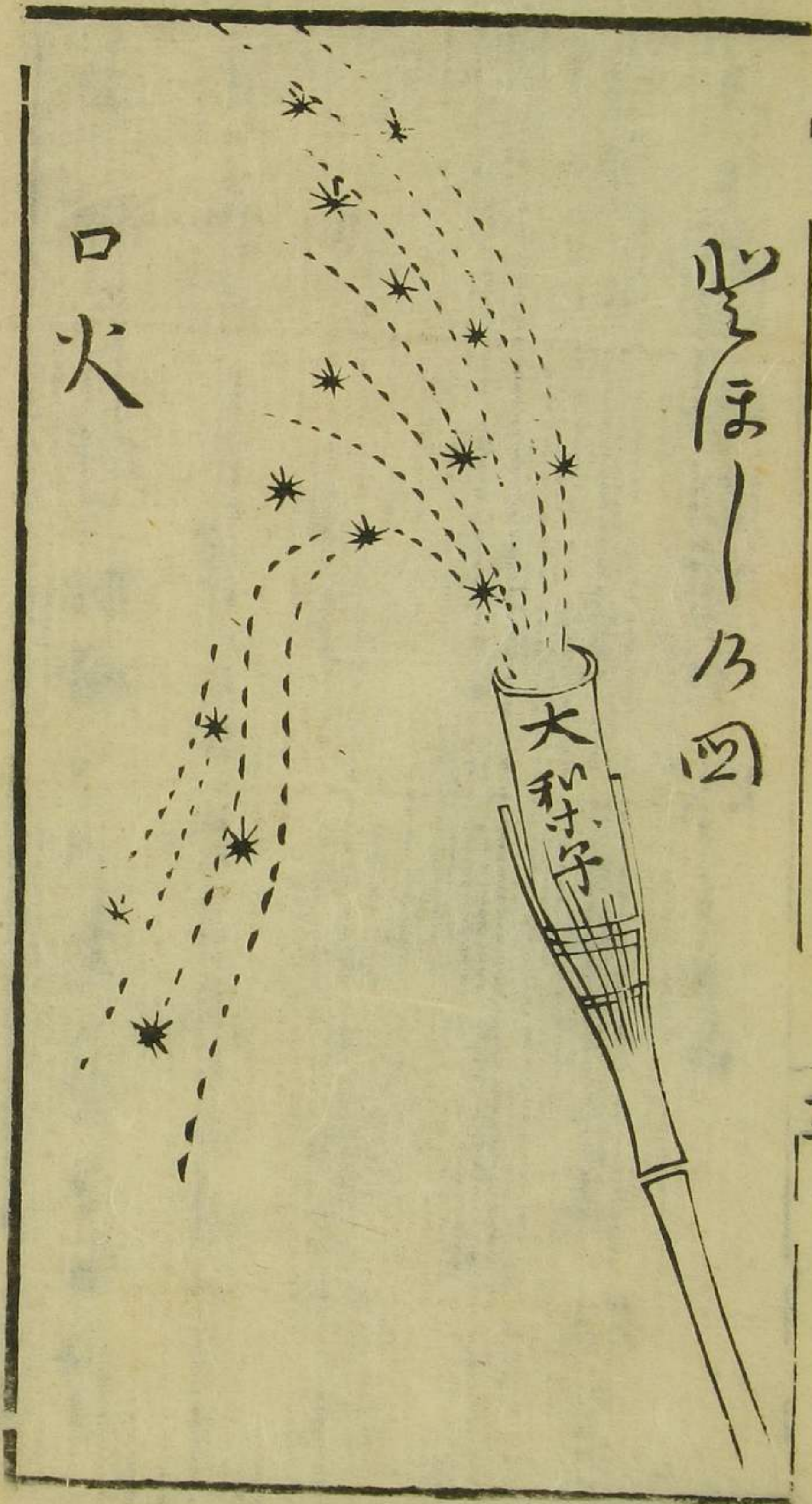
ふ来を割指の中は掉竹をさし一ら結して

さき針きりくと密く巻付穴を極杭を

立とぬ一ゆひはけ規一中以

此は一回

口火



一 焰硝 百目

一 硫黄 拾四

一 灰 貳拾八

口火ハいつき終夜火より火を移し
 中々いながらそけいもぬよえまの口火は
 括めて半減をよりり升て幅五分

切此糸をすく指すくはさく付く
小縷よ付る長く用る時ハ振うつ左
き合るまふ大かろうちよふハ心
ふくまふたれま

大雪

一 急んぢ〜 百斤 一 鉄 七斤半

い〜 拾四斤 一 木 一 柳 小回

都

一 焔硝 百斤 一 鉄 武拾斤
一 松皮 一 灰 三拾六斤
右持掬 四回

蓮花

一 五んせし 百目 一 灰 四拾五目

一 いしし 七目 一 灰 七拾五目

右 柳 小 同 一

金蘭の花

一 五んせし 百目 一 灰 三拾五目

一 いしし 八拾五目 一 灰 十目

右 小 柳 小 同 一

芍薬

一 五んせし 百目 一 灰 五拾五目

一 いしし 五拾五目 一 灰 八目

右 梅 小 同 一

武彦の秋

一 燭硝 百文 一 灰 貳拾文

一 硫黄 七拾文 一 硫 九文

右の如くや 柳 百文

秋の茶

一 烏んちり 百文 一 ちい 三拾九文

一 いりり 貳拾文 一 硫拾文

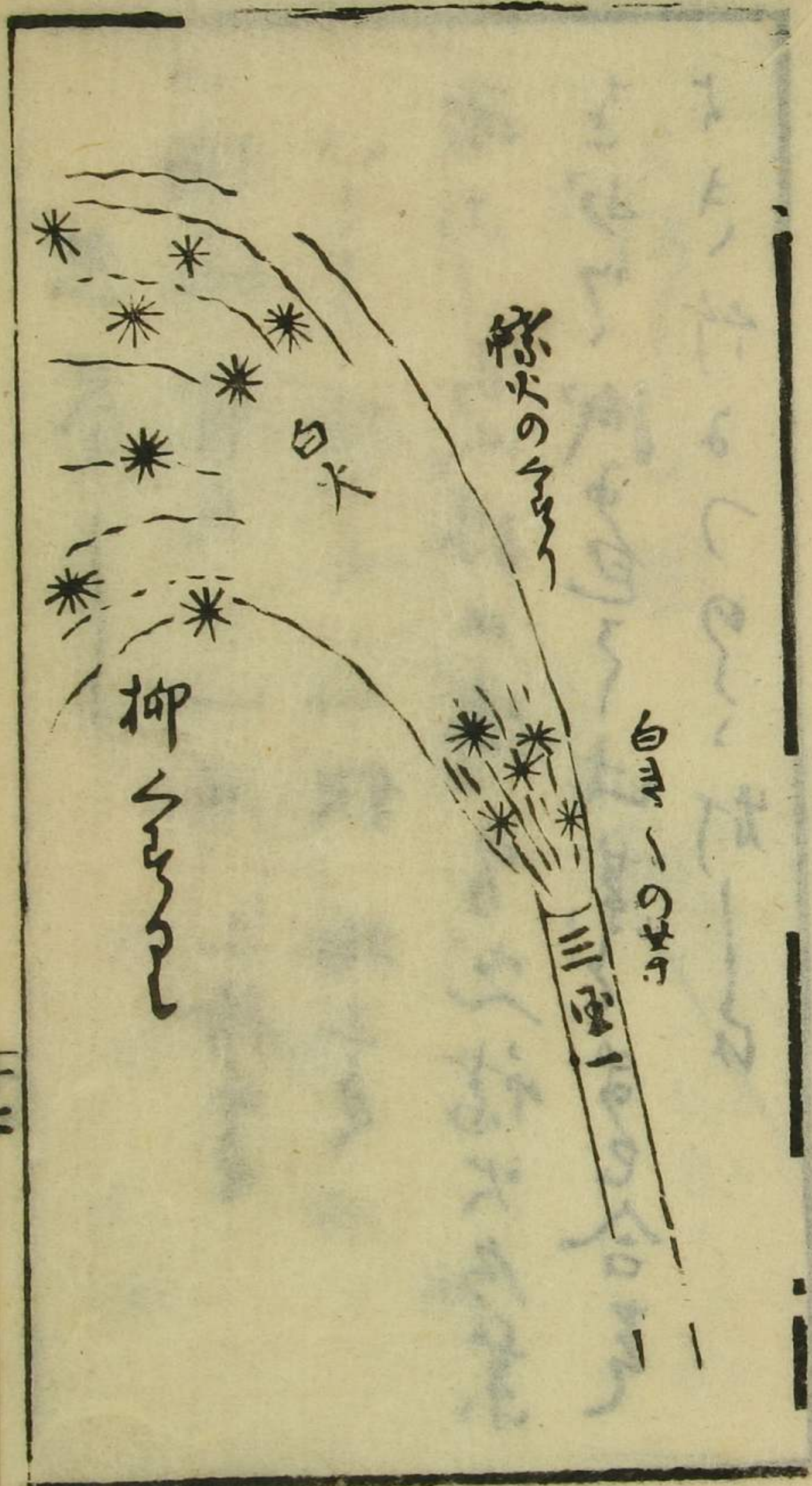
六拾文 柳 百文

三國

一 柳茶

一 燭火のくま

一 秋の白茶



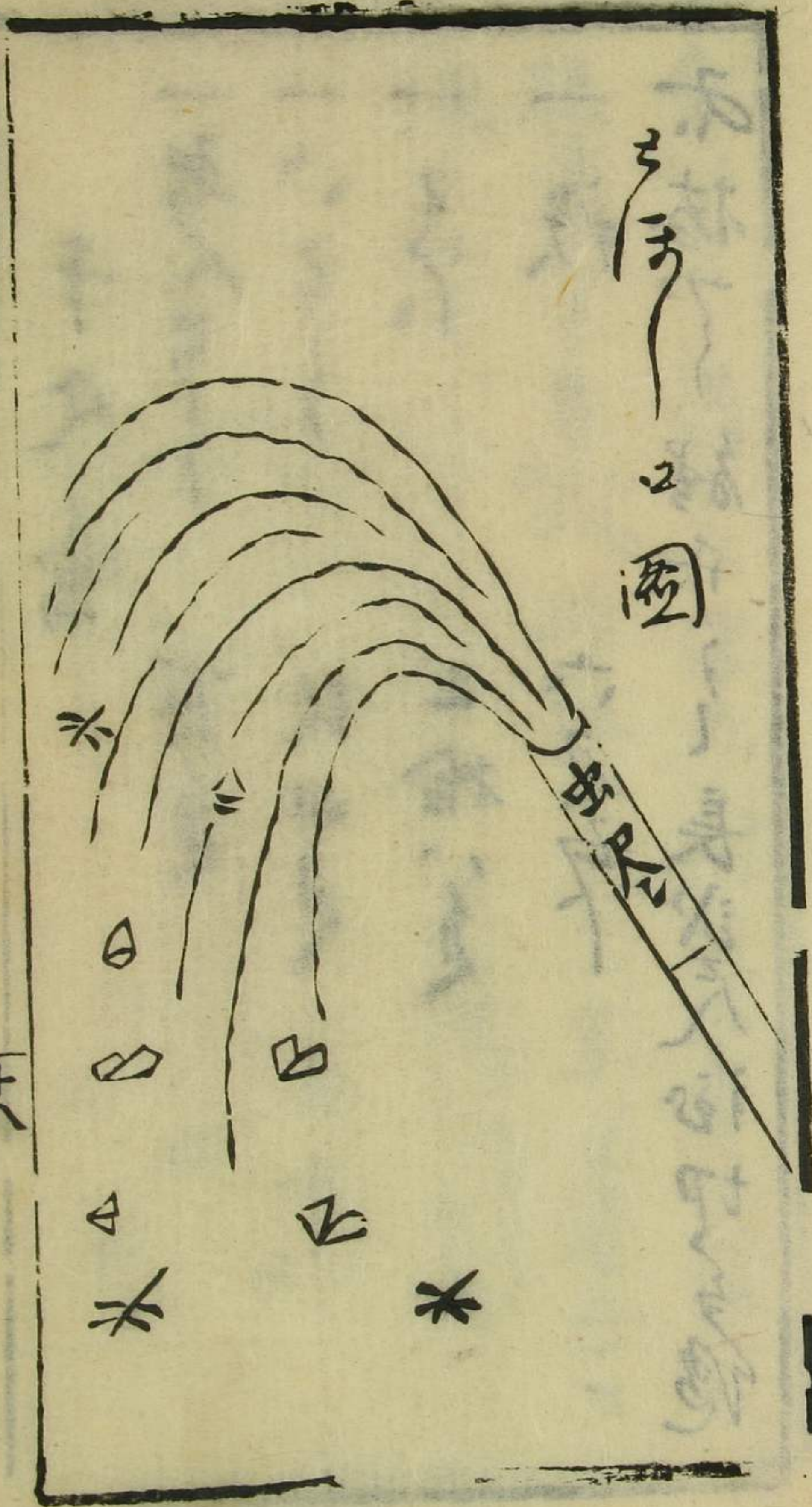
古梅の只侍者先よまかく舟を渡人
 とりり切る之寸程御く御く尾込
 をりり柳葉を寸程へり又標火をり
 寸程迄亦新の白葉乃葉を口上
 洗紙を洗る火をりて灯りり

虫尺一

一 燔硝 百斤 一 灰 三拾斤

いこく 拾五斤 一 鉄 拾三斤

君あしらの様は傳有定福火乃茶
をがり紙を包くは茶とまを合せ
よき竹まつのり、打し



六

千丈虫

一 冬人虫

百尺

一 虫

拾四尺

一 虫

之拾八尺

一 族

六尺五寸

不梅や能弁之長武尺秘切多德

分加々諸中以はめ耐はるる能申へ

疏黄々々々々此位より茶とまて合也

法中



千丈虫

目録

一 五んりく 百目 一 硫黄拾四
 一 そい 一 抄りり 一 漢字りり
 右より左へ 一 先初りり 一 此位より
 一 何れ茶入 一 漢字りり 一 口傳あり
 一 月日茶五分 一 証法上 一 茶抄りり 一 又りり



茶をばめりり 一 茶りり 一 上りり 一 ありり
 一 ありり

茶灯乃圖



花蠟燭
 一人也 百日 一丈六寸
 一磅者 拾四寸 一磅者 拾四寸
 燈中 能作 右 茶を つめ 相
 備 之 紙 式 分 小 標 火 乃 茶 を 守 先
 之 守 一 中 以

玉虫

多しき〜百目一灰に焼く

いり〜控置一鉄二下

者持種多傳有是細き炭に餘火の
 茶を籠た如く洗る如回先ける
 三分極つめ揚る茶め入る補つこの如く

うらぬを入るて茶洗中に

灯の川

白火



以上二拾六品

是ヨリ

上ケ物之部

此花之法はくさきふくす新と云
① 糸或ハ大川とくす新と云
と遠大切ニ中くす國とくす岸
二十間沖とくす法定法也

揚ヶ茶凡ヤリ凡薬凡

一 硝 硝 百目

一 灰 拾三目

一 灰 拾七目

茶上ケ茶之儀はふ大切仕合此茶火移り
安きまのふくす法はくす法定法也

傳る烟草のくくも惚懐中へ火を
し皆まゐいざくく大切に傳る相けらる
おまゝくやして様々強く成りて葉を
おのめ先なる竹二つ小割て因り
巻物符後越りておのめ打いてま
小刀くくまゝみまひや

玉火

一 焰硝百目 一 灰七反半
一 硫黄三拾五反 一 章腦七反
右玉火の傳やし傳有者ハ隨々
細くやがておろし板の板中
ハない竹を二つ小割て因り

末あ〜〜きう〜巻紙持を〜ふ。縫う〜
 縫う折がぬ折仕着て細引をよき中より
 出〜四分有る宛紙に川カゑたよ
 ーら〜さう玉ハあゑをけー甲けいんら
 小〜〜カム ○かゝの〜
 ね玉火お〜〜枯多るない竹ノ

巻紙を人九寸紙ぬ〜きハ切竹ハ中ぬく
 ーら成りう〜貝弁を青麻す〜〜巻
 紙をを尺斗折〜竹の甲〜八ます綿を
 随分〜〜法〜夫より柳葉五分紙法
 玉の大かぬより打も〜上〜茶入中〜
 た〜ハ玉或〜〜何〜葉或〜

玉を切口小お煎かきとせりく入
 口本をゆき入る時上と味を
 かへ入るに五丈も六丈も上り
 初玉を入柳葉入武口玉が
 始のとき入る

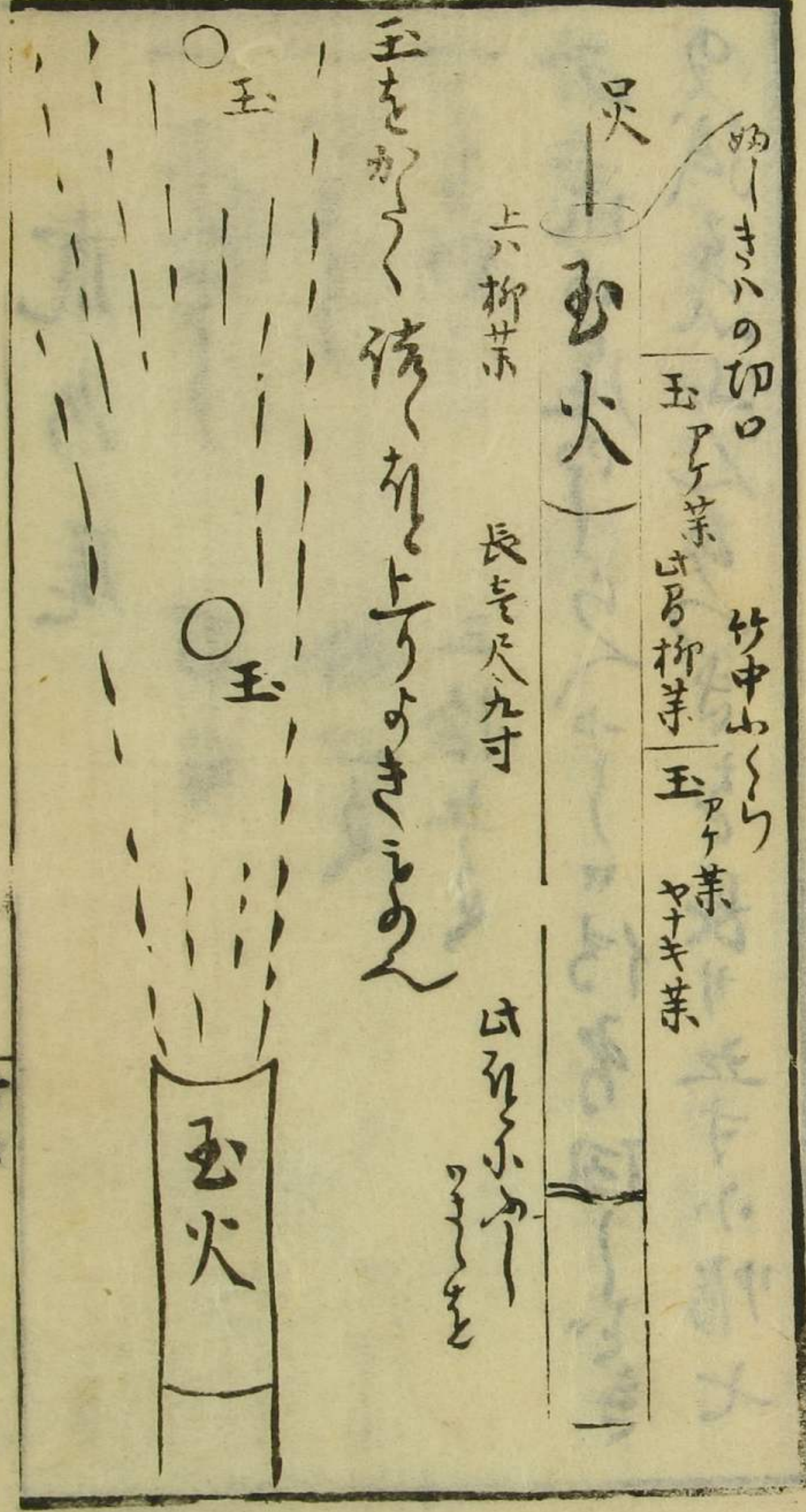
物一まの切口 竹中
 玉アケ葉 玉アケ葉 ヤナキ葉
 六柳葉 長き尺九寸
 玉火

玉をかくはく上りまき

○玉

○玉

玉火



虎乃尾

一 多んちり 百目

一 いりり 拾四目

一 ちり 三拾五目

お鹿の尾のうらうらう口付のねり
の減きんぞんあつきを長廿五寸小幅七

分ちりりい切り竹のきりりり巻糊めり
付尻のきりり糊り付さるはりりりりり

厚く洗ひ

柳葉 虎葉 上葉 柳葉 虎葉 上葉 柳葉 上葉 柳葉 上葉

虎乃尾



中めくらの竹をき尺九寸程切玉火の如
 く尻通して柳葉を入上ヶ葉を入上ヶ葉
 打まふきひよひ先此二つなれハ又柳葉を
 流上ヶ葉を入虎の尾を入まゝ柳葉ノ
 中めくらのつせ此玉火回あゝ



灯の図

蜂火

一 多んせう

百々

一 いり

抄書

一 さへ

抄書

おと傳ま川を志すきの成りかて長
七寸幅八分さうりか切とせれ尾のこく

竹のきりりく巻くは先ハ皮を糸めく

きりく巻の中

竹



は糸糸を巻の中
は糸糸をつらして、
糸糸をつらして、
糸糸をつらして、
糸糸をつらして、

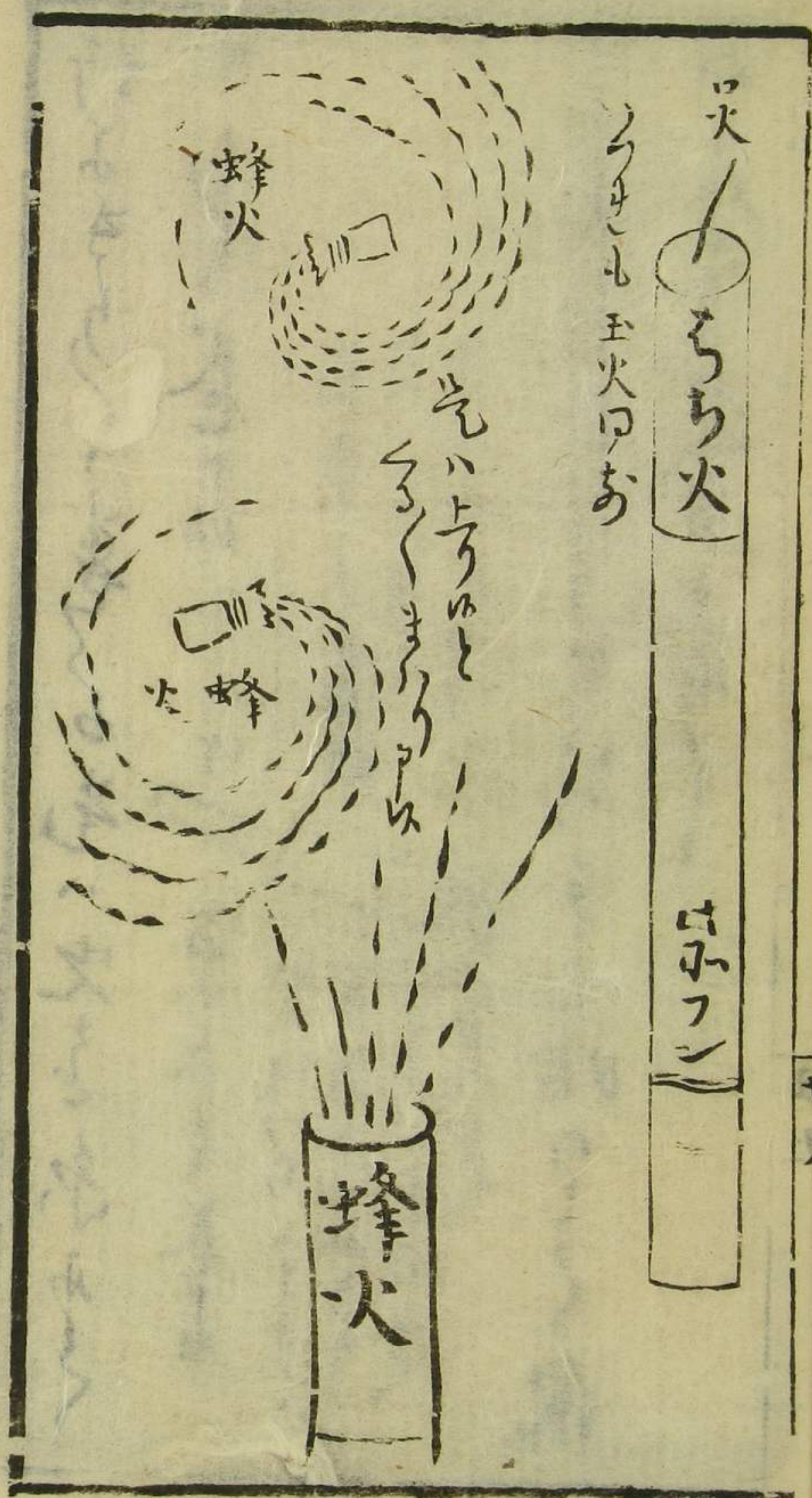
は糸糸をつらして、
糸糸をつらして、
糸糸をつらして、
糸糸をつらして、

この玉三つ玉なり丸いつまき丸始のこく糸
の尾から方まで

天のちり火

つらちも玉火口あ

はふん

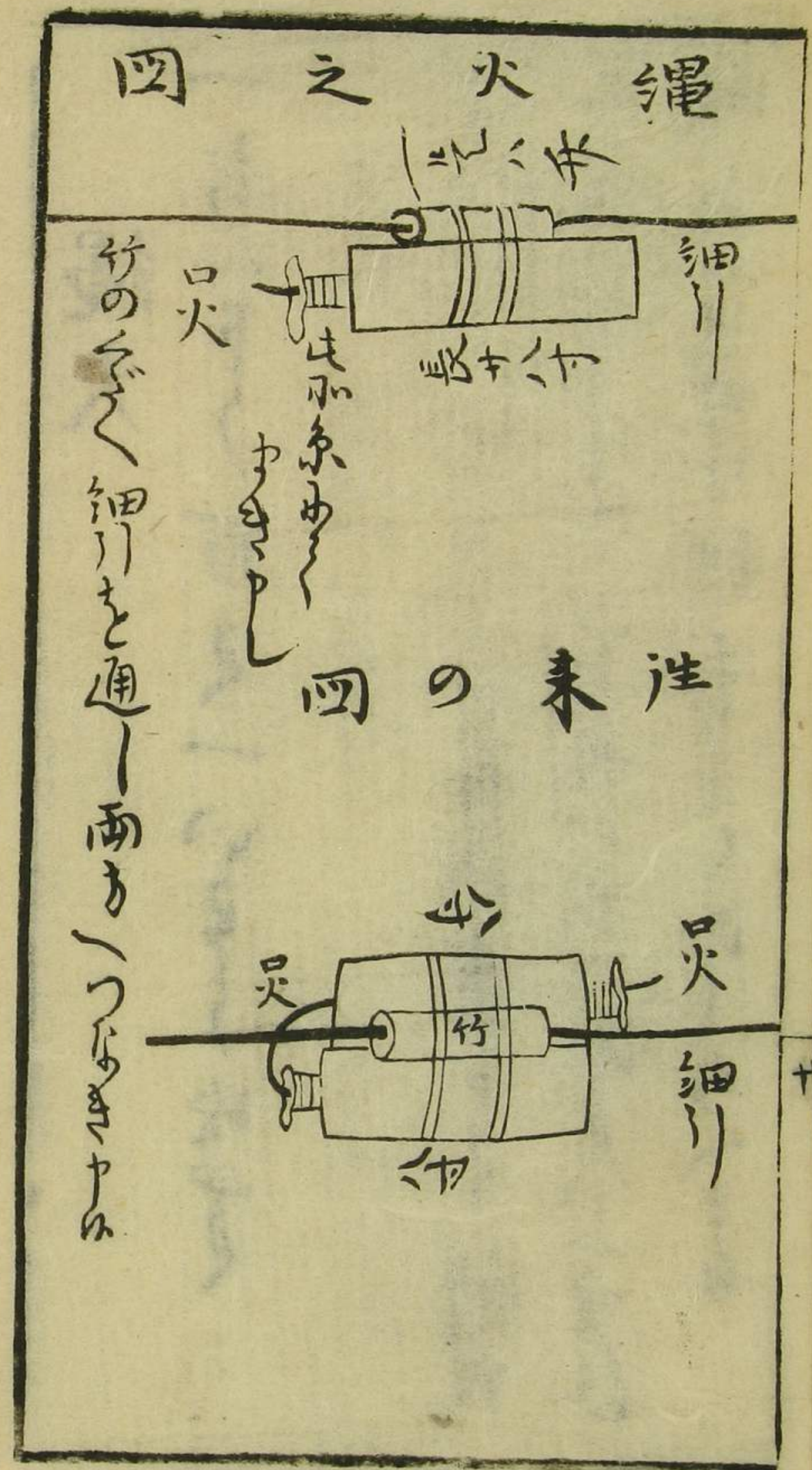
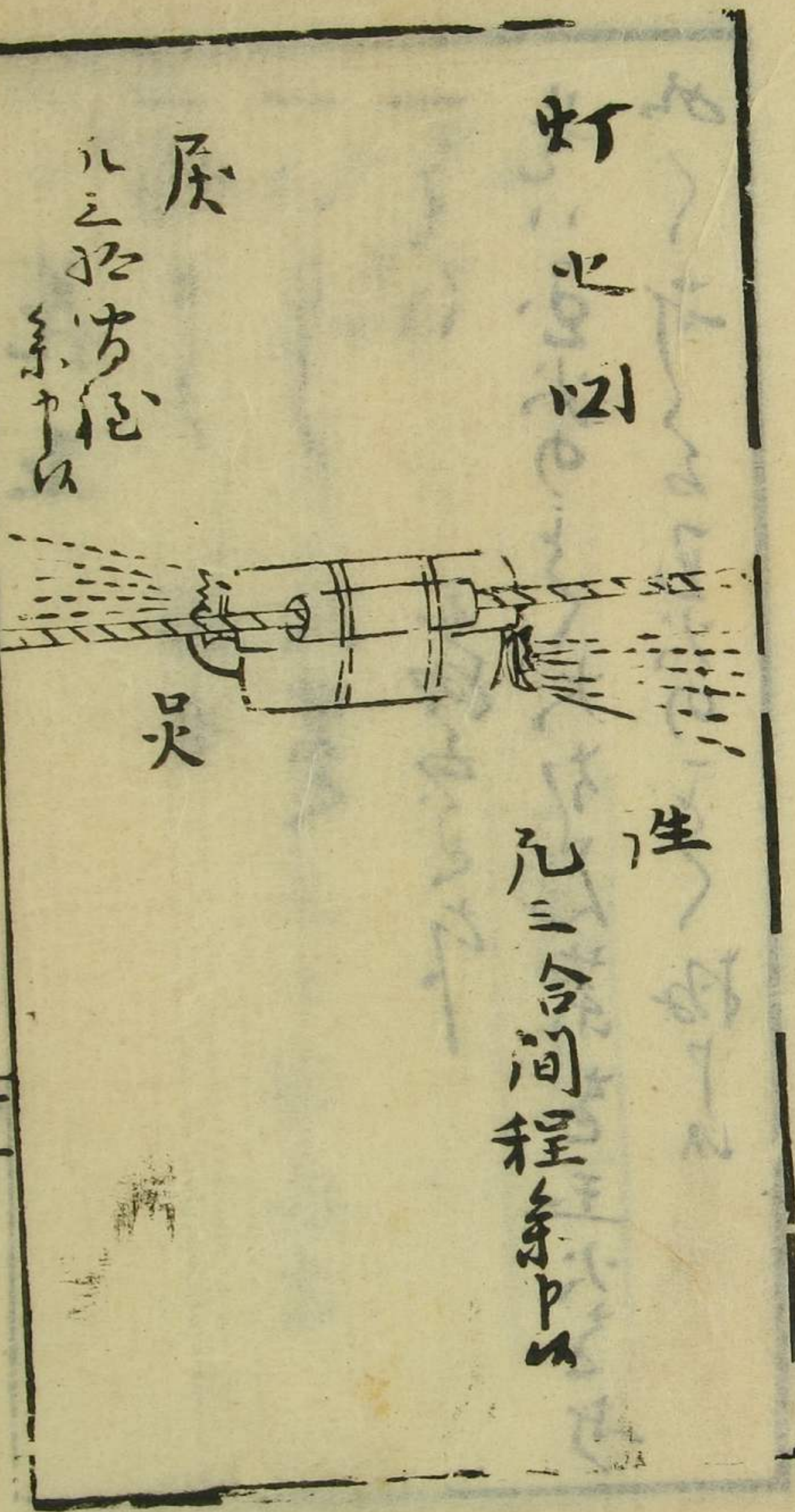


縄火

一 多しきく百久一いりし拾甲

一 多しきく武拾

右繩火先もしとまの束のふく繩火
を扱ふやに仕は先ハ出りまを八五すに
幅九寸斗小繩火のよくありらくや



花玉

一 焰

百日

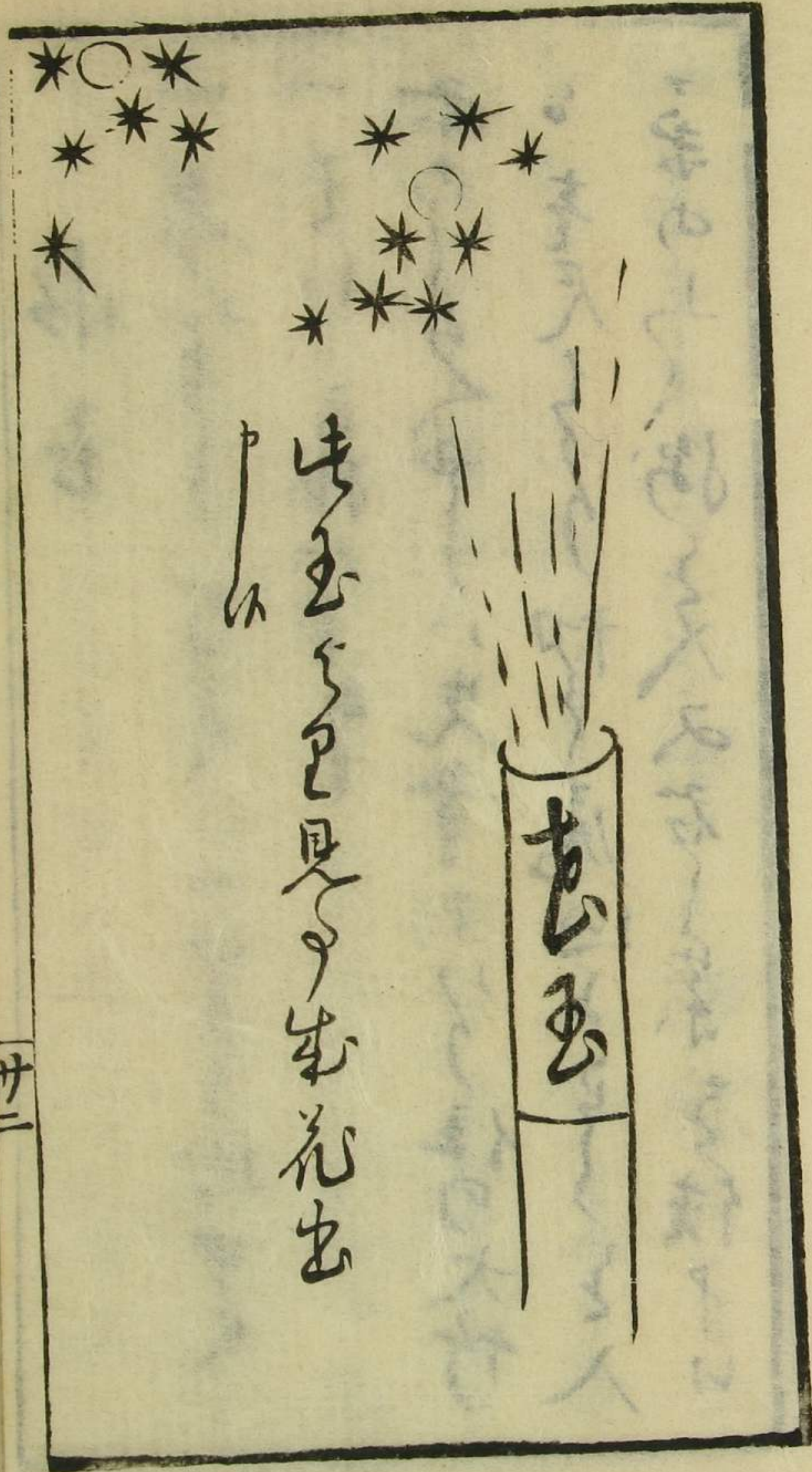
一 〓

拾葉

一 〓

三葉

是ハ玉火のとき大むん葉を玉火を打
ぬくおる玉火のときおる



玉火のとき見ゆ花出

水玉

一 五んちく 百色 一 ひとく 拾中

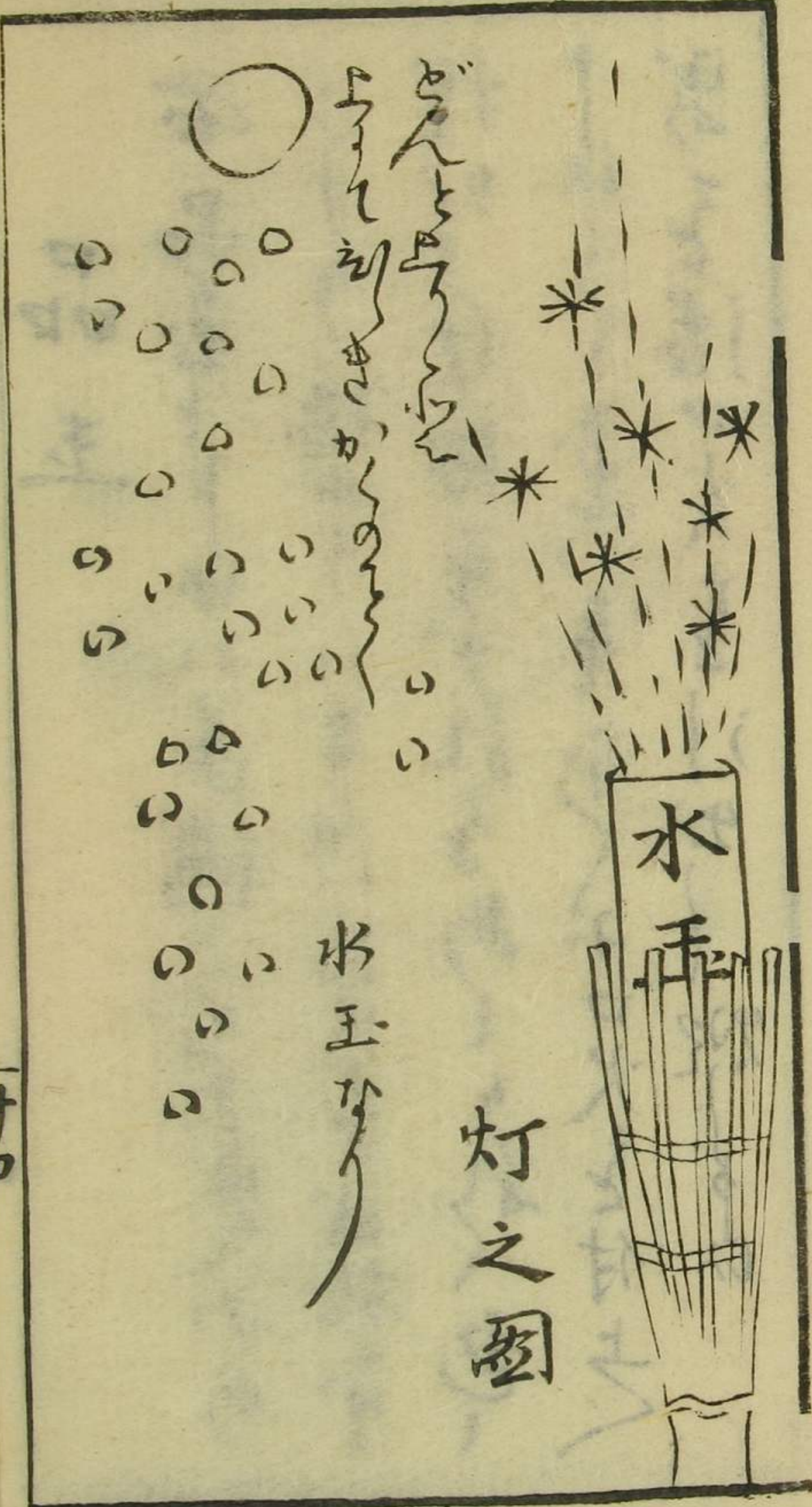
一 さい ちん八中

一 赤い ちん八中

一 赤い ちん八中

一 赤い ちん八中

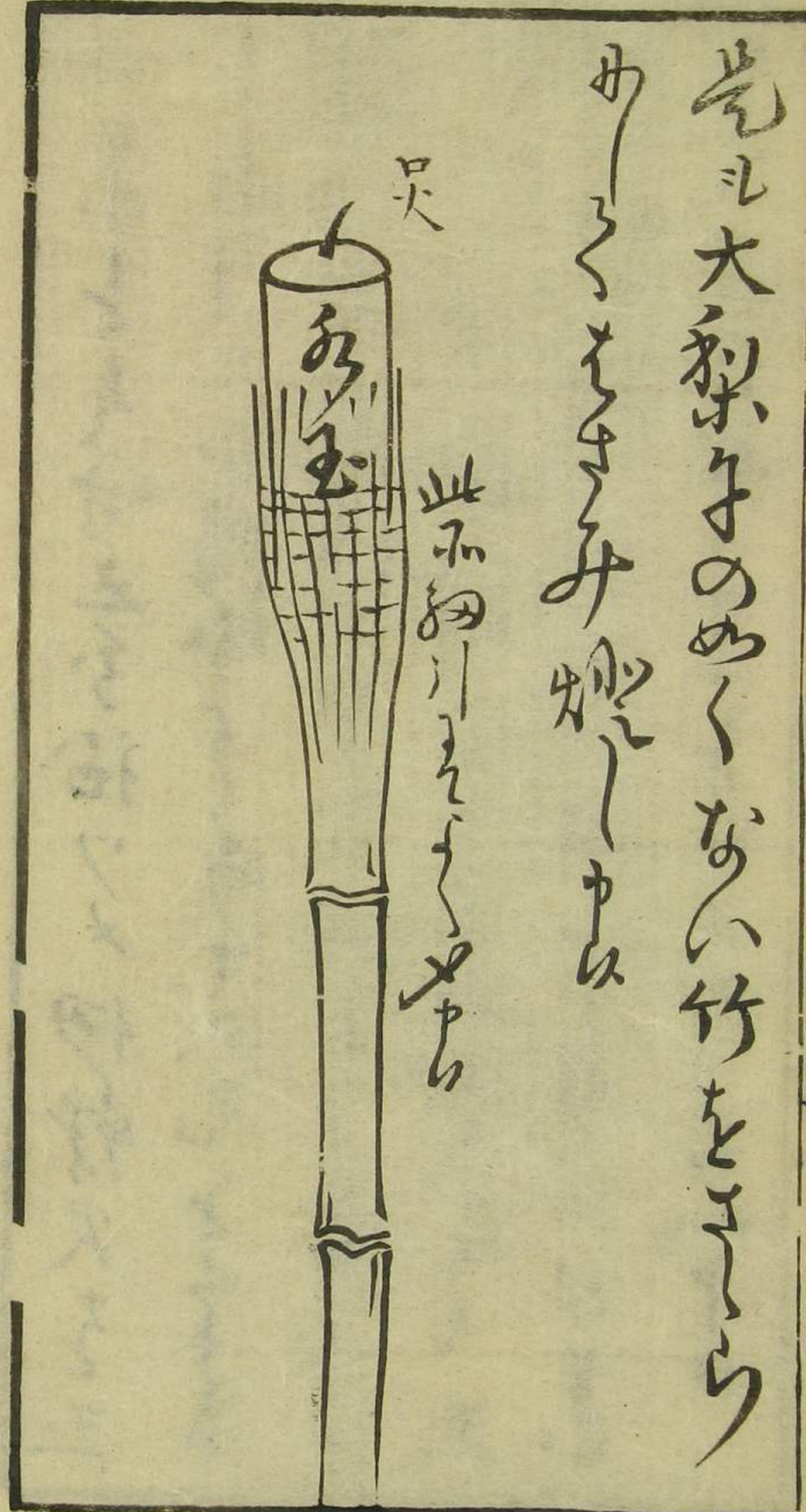
此茶を五寸五分に切つて茶葉火を玉
を打まくる位にふるきとて又火をくまき
〇〇〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
半紙に包み切つて茶の上へ是も玉
火のぬくおし水玉の目をうけつけ茶
を入すて布し茶をうめおしちん八中



灯之図

水玉灯

計四



此は大梨子のぬくぬい竹をこしらへて
 舟にさしつけし燈也

此は細川公の御用也

天

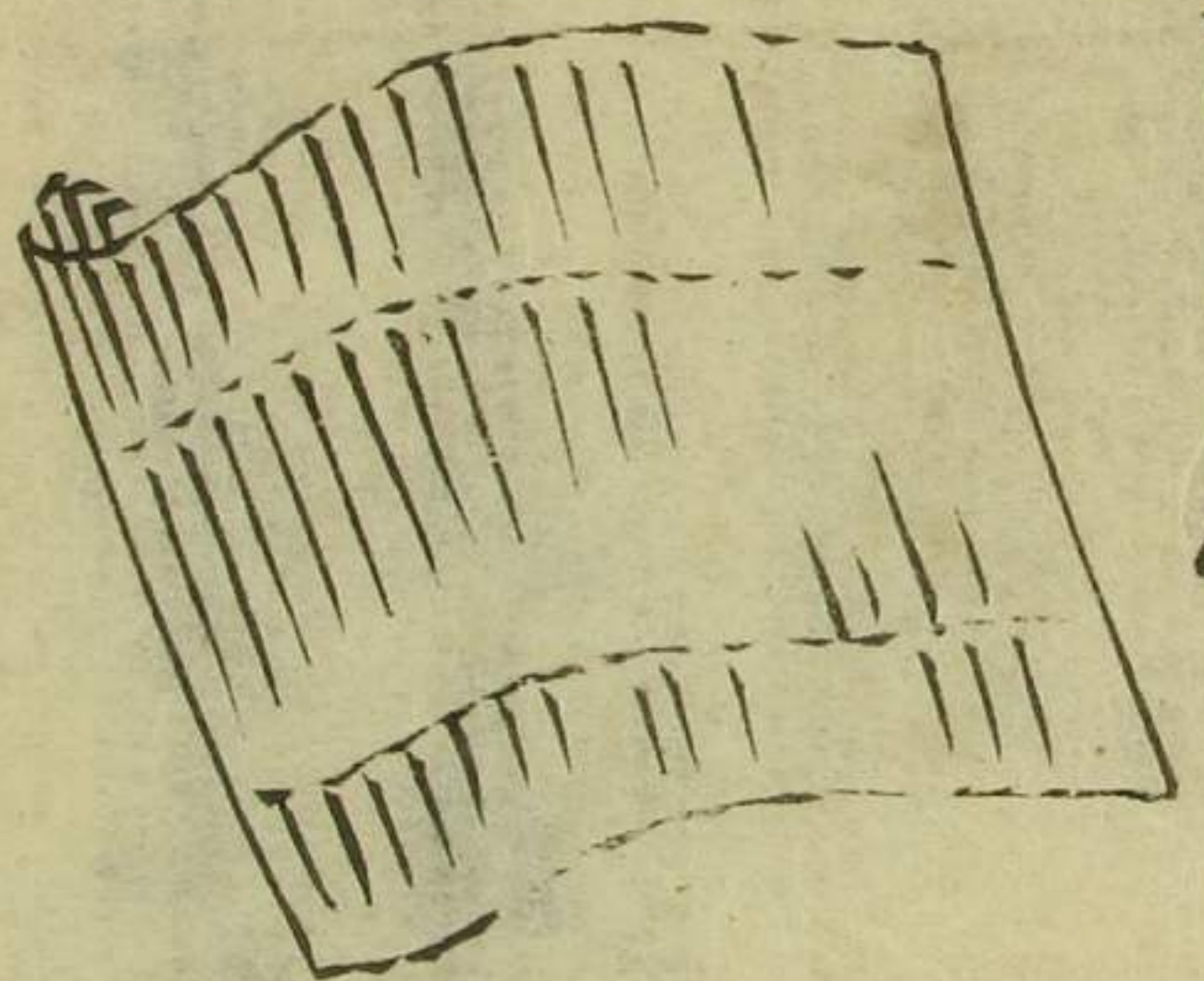
計三

品玉

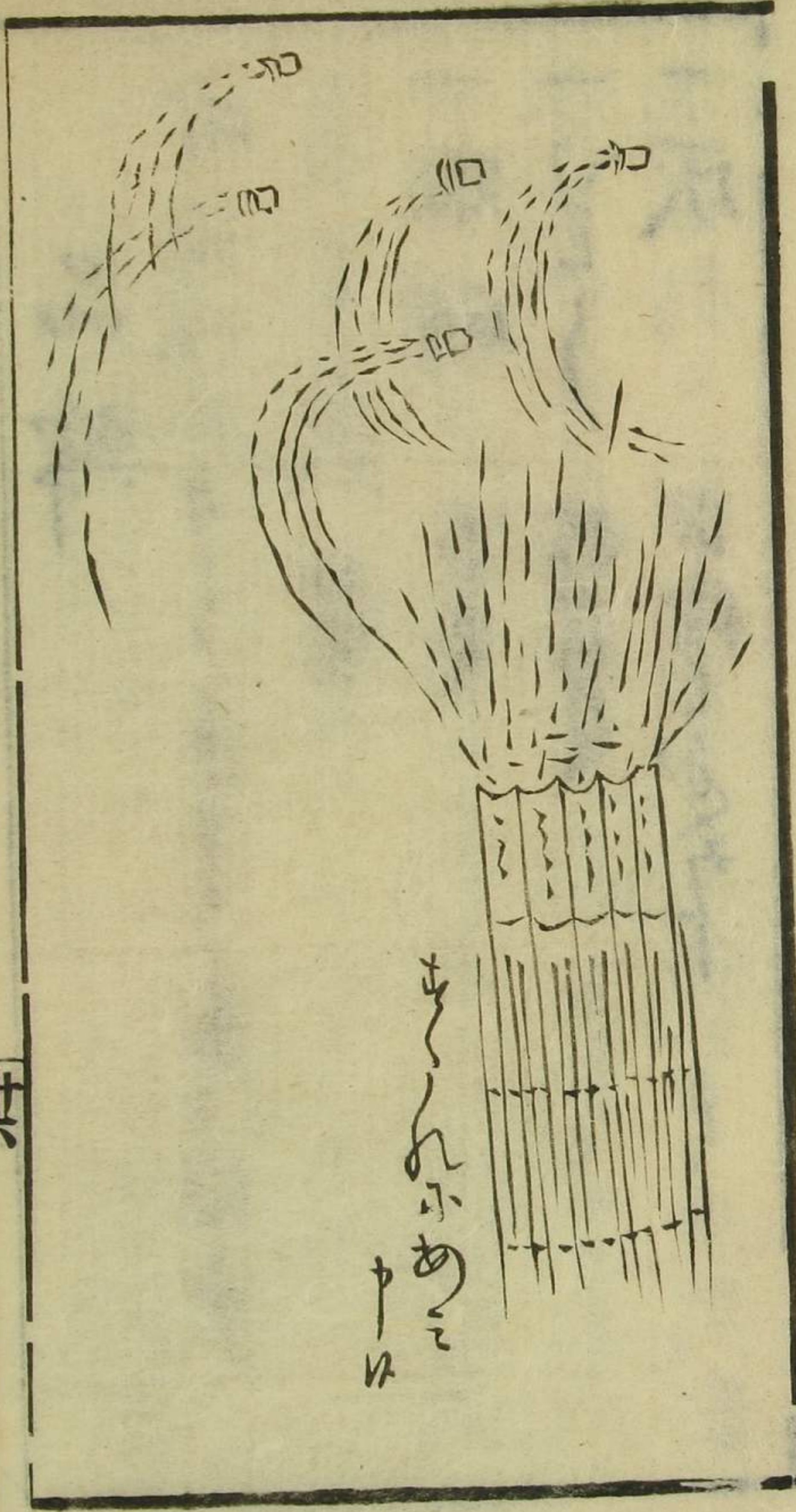
若品玉と申すは八手毬と申す中よりの
 手まり梅中ハまり玉火を武於本
 程かけ初まづれをあましく包み
 中よしく玉火を本く小口火を付上之
 寄を港口火を川出し知り申す



如圖



中



虎

品虎

持てし手まり玉の目等虎の尾を
 二十本ちうりかけまは純しは
 ツラカハ

上り好圖

虎

品蜂

右持珠品とくまう玉と白

と流星

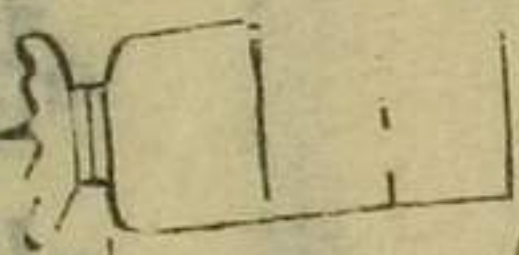
一 焰硝 百々

一 いざり 拾貳寸

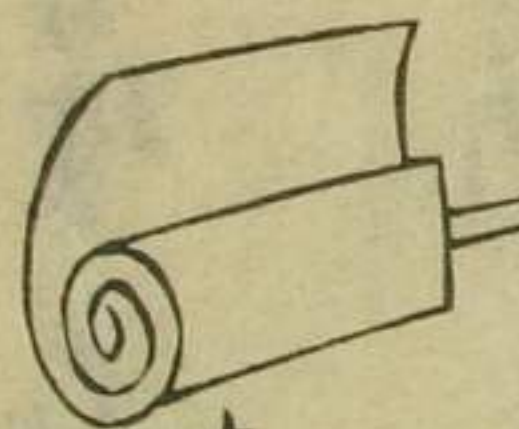
一 灰 以拾をる下

不持珠口傳るゆき先志とまの紙徳
分ありきを長貳尺幅貳寸ちうりに
まじり蜂火の屑を見ゆる中へ小びら
茶をまといめん堅くツメヤム

付不系ニテ巻ヤム

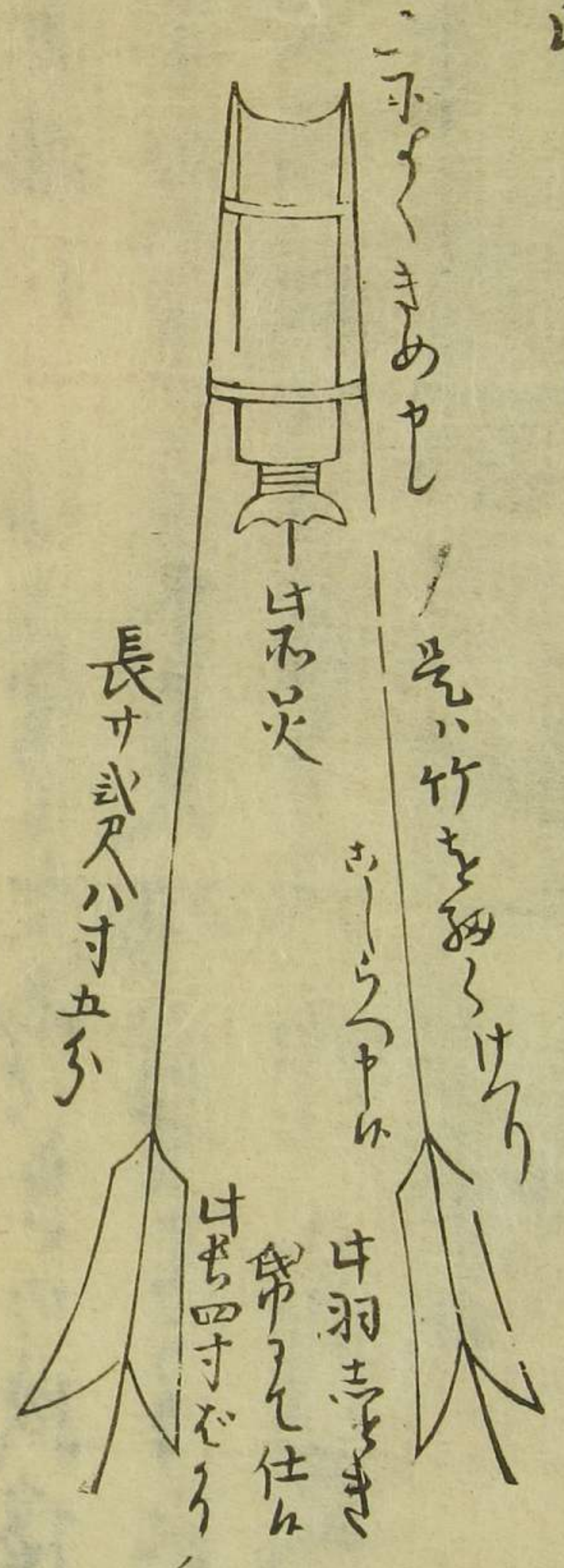


付先まりしむて口火を入し

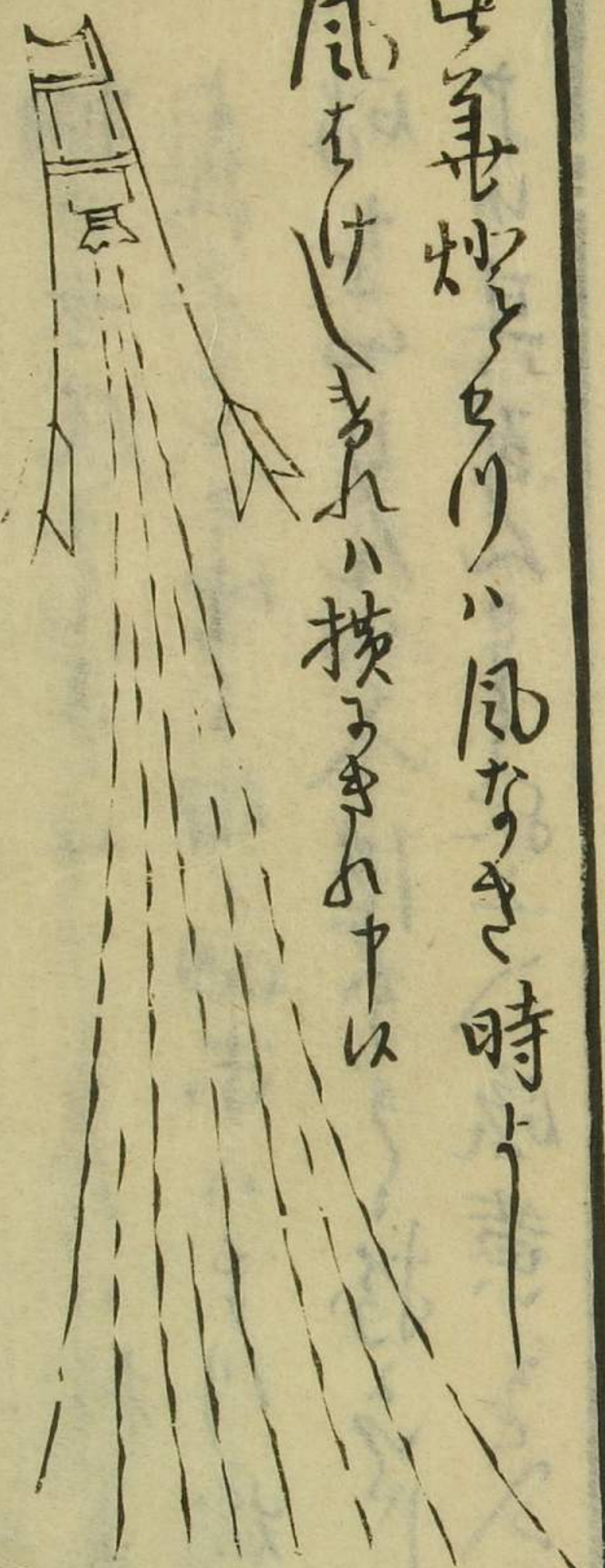


付不系テ巻ニ

此は火の海に流るる流星の掛
 物に中は



此は火の海に流るる流星の掛
 物に中は



お上り物十一品

一 藥 細末口傳

灰ハ念入ノ得ハ麻カクモハ仕ハメハ
桐の木灰ヲシヨク燻シテ川ハ樽ノ末
ト爲シクハ中ノ桐ノ末ハ川ノ端
硝ヲヤケンノ入徳分ヨク粉ニシ
中ハ具ニ入ルル此上ノ硫黄ヲ入

又ヨク粉ニシテ一モツト其上ノ末ヲ
入徳分ニシテ粉ニシテ一モツト中ハ
板鉄ノ入ヤハ外ハ中ハ此ノ末
合セ久ク燻シテハ花出テ中ハ
時ヨクモセ合テ中ハ

冬 侍流星

星々重流星

流星

蜂流星

大熊輝菓立

大かろり仕方

石 後編不出し申以

作者利笑板元

發行

江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛

同 二丁目 山城屋佐兵衛

同 二丁目 須原屋新兵衛

同 芝神明前 岡田屋嘉七

同 芝神明前 和泉屋吉兵衛

同 兩國横山町二丁目 出雲寺萬治郎

同 淺草茅町二丁目 須原屋伊八

大坂心齋橋北久寶寺町 河内屋源七郎 啟

書肆

